

3.11 自伝記憶、意味記憶と人名地名などの関係¹

本節では、最初に人物の自伝記憶、意味記憶などの文献考察を行う。そして、3.8 節から前節までの筆者の主張を地名も含めてまとめ、モデル図を示す。

人物記憶に関しては、以前知っていた人物の総合的な自伝記憶を失った報告が続いている。これらの症例はある人物の名前、顔、声、自伝など全てのモダリティーにわたる関連知識を喪失している (De Renzi et al., 1987; Grossi et al., 1988; Ellis et al., 1989; Barr et al., 1990; Graff-Radford et al., 1990; De Haan et al., 1991; 松井ら, 1992; Evans et al., 1995; 数井ら, 1995)。3.9 節の MN も同様であった。

さらに MN のように、本人の自伝記憶は残されるが、有名人の記憶が障害される場合と、反対に本人の自伝記憶が損なわれ、有名人の記憶は維持される場合がある (Mackenzie Ross & Hodges, 1997)。このことから、有名な人物と、本人や家族など身近な人物の記憶は、各々別々に損なわれることが明らかである。De Renzi ら (1987) および 3.9 節では、有名人は意味記憶に分類され、身近な人物は自伝記憶として分類され、それぞれ別個に記憶されるとした。Event-related potentials による実験でも、被検者自身の名前は、その他の人物の名前とは異なった処理を受ける可能性が示唆されている (Muller & Kutas, 1996)。

有名人に関しては、同年代の有名人と歴史上の有名人も区別される (Kartsounis & Shallice, 1996; Snowden et al., 1996)。MN の場合も、歴史上の人物のほうがより忘却の程度が強かった。同年代の有名人や芸能

¹ 本節は、次の論文をもとにした: Kiyoshi Yasuda et al., Brain processing of Proper names, *Aphasiology*, 14, (11), 1067-1089, 2000.

人も意味記憶として分類されるが、それらはメディアを通して、我々の日常生活に深く関わる場合がある (Snowden et al., 1996)。メディアを通じた彼らとの心的交流作用から (例えば、“私はあの歌手の歌が好きだ”)、同年代の有名人と歴史上の有名人の違いは説明できよう。Kartsounis と Shallice (1996)、Lucchelli ら (1997) もこの問題について論じている。

顔の記憶 (memory for face) は、右半球紡錘状回を中心に保持されている。有名人などの「意味記憶」的な顔と、本人や身近な人物の「自伝記憶」的な顔とは、区別されて記憶されている可能性があるが、いまだ報告を見していない。図 13 及び図 14 では、顔の記憶は従来通り、非言語性意味記憶に分類した。

次に、自伝記憶の下位分類についてである。自伝記憶は、自伝固有名詞 (例えば、学校名、友達名、先生名、職業名など) と自伝出来事の知識 (例えば、父親が亡くなった出来事 (Van der Linden ら, 1996) に分割できる。これは、自伝固有名詞は想起できるが、出来事の記憶が損なわれる症例がいること (Cermak et al., 1983; Warrington & McCarthy, 1988; McCarthy & Warrington, 1992; Hunkin et al., 1995; Mackenzie Ross & Hodges, 1997)、逆に自伝出来事は想起できるが、その固有名詞は想起できなかった症例がいる (Sirigu & Grafman, 1996) ことから、実証されよう。

筆者は自伝固有名詞は言語性自伝記憶 (Verbal autobiographical memory) として左半球内側部 (図 14) に、自伝出来事は非言語性自伝記憶 (Non-verbal autobiographical memory) として右半球内側部に関係する可能性が高いと考えている。ただし、Conway と Fthenaki (2000) によれば、自伝記憶障害はさまざまな部位で生じており、今後の検討課題である。

多くの著者は有名人の自伝記憶は右半球の側頭葉 (松井ら, 1992) や側頭葉前部 (Ellis et al., 1989; Sergent et al., 1992; Kapur et al., 1994;

Evans et al., 1995)に記憶されると推測している。また、一側だけの障害では不十分で、障害が脳の両側に起こったとき、人物知識の喪失は起きるとの主張も説得力がある(松井ら, 1992; Kapur et al., 1994; 数井ら, 1995)。前節のMNも両側側頭葉に損傷が及んだあとに、有名人の意味記憶障害が出現している。

Kopelman (1998) や Eslinger (1998)は本人の自伝出来事の知識は右半球で処理されると推測している。さらに、三村ら(1997)は、内側側頭葉がより自伝出来事の知識に関係が深いとしている。3.9節では文献考察から楔前部、後部脳梁膨大、後部帯状回などが本人の自伝記憶に関わりがある可能性が高いと述べた。脳の内側に位置するのは、自伝記憶が他の動物でも同様、自己の生存に関わるものであり、発生学的にもより古い記憶である。そのため、発生学的に古い脳の内側と関係するのであろう。

Valentineら(1996)のモデルは有名人と、自伝に関わる人物との区別を行っていないが、いずれにせよ identity-specific semantics の機能は、我々のいう自伝記憶に相当する。現在知られている文献より、筆者は有名人の自伝記憶が、非言語性意味記憶(Non-verbal semantic memory)として右半球側頭葉外側の前半部に、本人の自伝記憶は非言語性自伝記憶(Non-verbal autobiographical memory)として、右半球の内側の中心部で前頭葉から後頭葉に至る部位に展開していると推測している。ただし、障害として現れるのは、既述のように多くは両側性の障害であらう。

最後に、自伝または公共的「出来事」の記憶とは何かを考察したい。出来事とは、ある一定の時間内におこる、さまざまな人物の言動や行動、そのときの音響や視覚的な情景などの集まりである。これらは主観的な操作のもと、ある主題のもとに、まとまりの自覚をもって記憶されている。

3.9節では、ある事象は前頭葉において、differentiate processing を

受けて意味記憶か自伝記憶かに分類されると示唆した。前頭葉では、さらに各事象の時間的な順序付けや文脈化なども行っている (Damasio et al., 1985)。このような文脈化、いわば contextual processing は当然ながら、事象の流れを「原因」、「目的」、「経過」、「結果」などの因果関係のもとに構成している筈である。このような文脈化が終了したものを、我々は「出来事」として意識し、そこに主題名である固有名詞を付与して、記憶していると思われる。例えば、3.9 節の「湯川博士のノーベル賞」や、映画「24 の瞳」などの公共的出来事の記憶のようにである。

ところで、3.5 節のように一般名詞の本質的な属性は semantic processing を受けて、一般名詞の意味的ネットワークを形成している。この一般名詞の言葉の“意味”の記憶も、当然ながら意味記憶の中に含まれている。しかし、意味記憶はそれだけではない。有名人の自伝やゴシップ、歴史的事件の裏話などさまざまな偶然的属性もふくむ。前頭葉における contextual processing は、これらの本質的な属性や、名前、顔、声、情景、事件の経過などさまざまな偶然的な属性をある主題のもとに統合するものであろう。

3.9 節で筆者は、側頭葉の 21 野が意味記憶の処理に中心的な役割を果たしていると仮定した。側頭葉のなかでも、21 野は側頭連合野の中心であり、意味記憶の“最高処理分野”と考えられる。上記の統合された意味記憶としての公共的出来事はそれゆえ、その統合記憶の知識を 21 野に移管されるものであろう。そして、それらの結合の維持のために、前頭葉のみならず、海馬、紡錘状回などが常に関与しているものと思われる。そのため、両側の 21 野が障害された MN は、公共的出来事、有名人などの記憶が重篤に障害されたのであろう。

以上の固有名詞、自伝記憶、意味記憶などの関係についての論旨をまとめ

た。図 13 は本章の議論を機能面よりまとめた認知心理学的モデルである。図 14 は図 13 の中の機能のなかで、責任病巣がある程度明らかになってきたものを脳の部位別に配置した神経心理学的モデルである。

(図 13、図 14 参照)

まとめ

本節においては、人物の記憶が有名人と、本人や身近な人物とに分離して記憶されていること、自伝記憶は出来事の記憶とその固有名詞の記憶に分けられることに言及した。そして、本章で述べた人名の処理、一般名詞の処理、自伝記憶、有名人やその他の意味記憶などの関連や成立機序を考察し、以上の関係を認知心理学的モデルと神経心理学的モデルとしてまとめた。

